

『萬葉集』の「鵜にしも有れや家念はざらむ」

佐佐木隆

1

つぎの『萬葉集』の四首のうち、第一反歌2の第四句と第五句の解釈には諸説がある。

辛荷嶋を過ぐる時に、山部赤人の作る歌一首 短歌を并せたり

1 あぢさはふ 妹が目かれて しきたへの 枕も巻かず 桜皮纏き 作れる舟に 真梶貫き 吾が傍ぎ来
れば 淡路の 野島も過ぎ いなみつま 辛荷の嶋の 嶋の際ゆ 吾家を見れば 青山の そことも見え
ず 白雲も 千重になり来ぬ 傍ぎたむる 浦の尽 往き隠る 嶋の埼々 隈も置かず 憶ひそ吾が来る
旅の日長み

反歌三首

〔六・四三〕

2 玉藻茹る 辛荷の嶋に 嶋廻する 水鳥^う二四毛有哉^{いへおもはざらむ} 家不念有六

〔六・九四三〕

3 嶋隠り 吾が傍ぎ来れば ともしかも 倭へ上る 真熊野の船

〔六・九四四〕

4 風吹けば 浪か立たむと 伺候ひに 都太の細江に 浦隠り居り

〔六・九四五〕

第四句へ水鳥二四毛有哉のへ有哉^{あれや}は、ふるくは「有れよ」の意の命令表現だと解されていた。しかし、この種の表現にあらわれる活用形は命令形ではなく已然形であるということが、これに類似する表現をもつ他の例の仮名づかいによって確認されるにいたった。それ以来、へ水鳥二四毛有哉は特に問題のおおい表現として注目されるようになり、へ水鳥二四毛有哉^①あるいはこれに類似する語構成をもつ他の歌の表現をどのように解釈すべきかという問題を正面からとりあげた論考が、語学専攻者のそれを中心にくつか発表された^②。それらの論の主たる関心の対象となっているのはやはり2のへ水鳥二四毛有哉の句末の部分であり、これまでに、その原文のへ有哉を仮定表現として「有らばや」「有らばか」と訓ずるのがよいとする説、この歌は反語「有れや」のところで文が終止する形式のものだとする説^③、「有れや」は肯定的詠嘆をあらわすものだとする説、その他の説がある。また、歌末の助動詞「む」についても、これを推量をあらわすものと解する説と意志をあらわすものと解する説とがある。現在の注釈では、へ有哉は既定表現として「あれや」と訓じられ、それは反語として以下の推量表現にかかると解されている。

しかし、そのような点で現在の諸注の見解が一致していることは事実であるが、「鵜にしも有れや」という表現に対する具体的な解釈や説明はまちまちであり、したがって、これの口語訳もまたきわめて多様なものとなっ

ている。そのことを確認するために、比較的あたらしい十種の注釈の、第四句・第五句に対応する部分の口語訳・大意をあげる【全集本とはばおなじ研究者が校注を担当している新編全集本の口語訳は、全集本のそれとおなじであるから挙示しない】。

『萬葉集全註釋』——鵜ではないのだが、もし鵜であつたら家を思わないだろう。

『萬葉集私注』——鵜でも得りうるならばよい。それなら家のことも思はずに居るであらう。

『萬葉集評釋』——あの鵜で我が身もあつて欲しい。それだと家を戀しがらずにみよう。

大系本——鵜でもないのに、（どうして）家のことを思わずにいられようか。

『萬葉集注釋』——鵜でもあるといふので家を思はないであらうか。（鵜ではない自分は家を思はずにはゐられないことよ）

全集本——鵜でもあつたら 家を思わずにいられることだろうか。

集成本——鵜でもあるというのか、鵜ではないのだからどうして家を思わないでいられよう。

『萬葉集全注』——あれは鵜であるので家を思わずにいるのだろうか。

講談社文庫——鵜だからとて、家を思わないだろうか。

『萬葉集釋注』——鵜でもあるというのか、鵜ではないのだから、どうして家のことを思わずに居られよう。

これだけの多種多様な解釈がある事實は、「鵜にしも有れや」という表現そのものの解釈が困難であるだけで

なく、これと次句の「家念はざらむ」との意味的・論理的な関係はどのようなものであるかという問題もまた解明困難なものであることを、そのまま反映するものである。

以上の注釈のうち、歌の構文に関する指摘を比較のおおくふくむ全集本には、頭注本にしては異例のつぎのうなながい説明が付されている。

鵜ニシモアレヤは鵜ニシモアラバカと同じ気持か。鵜ではないので、家を思わないではいられない、の意であらう。疑問条件は「花つ妻なれや紐解かず寝む」（三七〇）のように、普通、他人の事に関して、AだからというのでBなのだろうか、すなわち、BであるのはAだからなのだろうか、として、現在の事実Bの理由をAかと疑問推量する文型式である。したがって、これも、自分以外の人について、家を思わないでいられるとはあの人は鵜でもあるからなのだろうか、と解するのが上代語一般としては正しいが、作者赤人の気持は、自分が家を思わずにいられることを望んでいると思われる。この歌の解釈をめぐって異説が多い。

新編全集本にもおなじような趣旨の解説がみえるが、ここでは第四句をまず「難解」と説明し、類似の構文をもつ歌のなかでは当該歌の表現が異例となると説明したあと、解説の最後に「後考を待つ」とのべてある。全集本と新編全集本とのあいだには刊行年に二十三年のひらきがあるにもかかわらず、前者で指摘された問題が、後者の刊行時にいたっても未解明のままにのこされているのである。これも、やはり「鵜にしも有れや」という表現のもつ意味やニュアンスを構文的に説明することがいかに困難なものであるかをしめすものである。

本稿では、〈者〉字をふくまない〈有哉〉を「有らばや／有らばか」と訓するのは適切でないという従来の指摘を妥当なものだとする前提にたち、「動詞已然形＋や／やも」という上代語の結合形がもつ機能とそれがあらわす意味とを確認したうえで、「鵜にしも有れや」と次句の「家念はざらむ」との承接関係を構文論的見地から考察する。

2

2の「鵜にしも有れや」の「有れや」もその一例である、上代の「動詞の已然形＋や／やも」という結合形の用例には、諸注の訓と解釈におおきいゆれのあるものを除外して、2のほかにも『萬葉集』に六十例、『日本書紀』に二例、『続日本紀』所載の宣命に二例の、計六十四例がある。その具体的様態を、「鵜にしも有れや」という表現について考察するまえに一瞥しておかなければならない。

「動詞已然形＋や／やも」の用法は、この結合形が文にあらわれる位置とそれがあらわす意味とによって、つぎの三種に大別できる。

- I 「動詞已然形＋や／やも」が文末に位置し、そこでひとまず終止した文が明瞭な反語となるもの
- II 「動詞已然形＋や／やも」が文中に位置し、それ以下に表現主体が事実だと判断した事態や現象が提示されるもの

III 「動詞已然形十や／やも」が文中に位置し、それ以下に表現主体にとって不本意な事態や意外な現象が推量のかたちで提示されるもの

I の形式の用法は、明確な反語でいいはなつという比較的単純なものである。これに属するものは二十八例あるが、五例だけあげておく。

- 5 たまきはる 内の朝臣が 腹内は 小石阿例椰 いざ鬨はな吾は 〔紀二六〕
- 6 倭文たまき 賤しき吾が故 大夫の 荒争ふ見れば 生けりとも 逢ふべくも有哉 ししくしろ 黄泉 〔元二八五〕
- に待たむと 隠り沼の 下延へ置きて：
- 7 奥山の 磐かげに生ふる 菅の根の 懃ろ吾も 不相念有哉 〔四・五二〕
- 8 海原の 根柔ら小菅 あまたあれば 君は忘らす 吾和須流礼夜 〔四・四八六〕
- 9 男のみ父の名負ひて、女はいはれぬものに阿礼 立ち双び奉 仕し理にあり、となも念はず。 〔王詔四〕

I の形式の例には、明瞭な特徴が二点ある。第一点は、569の三例がそうであるように、反語表現の「已然形十や／やも」のところで終止した文のあとにつづく別の文は、その末尾に「な」「む」「理」などの語をもちいて願望・意志・義務などの意味をあらわすものになっているという点である。挙例は割愛せざるをえないが、反語終止した文のあとに別の文がおかれたものは十例あり、そのすべてがそうした意味をあらわすものとなっている

る。第二点は、その別の文はどのようなニュアンスで直前の反語表現をうけてもよいというのではなく、たとえば、5が「腹の中に小石などつまっていない。(だから) さあ聞おう、我々は」の意であるように、「……だろうか、そうではない。だから、…」という順接的な関係で以下の表現をみちびくという点である。^③

Iの形式が「已然形十や／やも」のところで文が終止するものであるのに対して、IIとIIIの両形式は、この結合形が文の途中に位置する点で共通している。しかし、IIの形式では、表現主体が経験あるいは確認した事態を「已然形十や／やも」よりあとの部分でのべ、その事態を生じた理由を「已然形十や／やも」までの部分で推測するとうかたちになっているのに対して、IIIの形式では、表現主体が想定した事態あるいは推量した事態をその両部分で推量の助動詞をもちいてのべる、という差異がみられる。

IIに属するものは二十七例あるが、Iとおなじく五例だけあげておく。

- | | | |
|----|---|----------|
| 10 | 古 <small>いにしへ</small> の 人に吾有哉 <small>あれや</small> ささなみの 故き京 <small>ふる</small> を 見れば悲しき | (一・三〇) |
| 11 | 吾が念 <small>しる</small> ひを 人に令知哉 <small>しるれや</small> 玉匣 開きあけつと 夢にし見ゆる | (四・五〇) |
| 12 | 潮満てば 入りぬる磯の 草有哉 <small>なれや</small> 見らく少なく 恋ふらくの多き | (七・三九四) |
| 13 | あぶり干す 人も在八方 <small>あれやも</small> 家人の 春雨すらを 間使ひにする | (九・六六〇) |
| 14 | 粟島の 逢はじと思ふ 妹に安礼也 <small>あれや</small> 安眠 <small>やすみ</small> も寝すて 吾が恋ひ渡る | (十五・三六三) |

IIIの形式に属する用例は八例しかないので、全例をあげる。

- 15 石倉の 小野ゆ秋津に 発ち渡る 雲にしも在哉 あれや 時乎思将待 ときをしまたむ (七・二六八)
- 16 白檀 石辺の山の 常石なる 命哉 いのちなれやもこひつをらむ 恋乍居 こひつをらむ (十一・四四四)
- 17 足柄の 箱根の嶺ろの にこ草の 花つ妻奈礼也 なれや 比母登可受称牟 ひもとかずねむ (十四・三七〇)
- 18 緑児の ためこそ乳母は 求むと云へ ちのめやきみが 乳飲哉君之 ちのめやきみが 於毛求覽 おももとむらむ (十三・二九五)
- 19 しましくも 一人ありうる ものに安礼也 あれや 島のむろの木 波奈礼弓安流良武 はなれてあるらむ (十五・三〇二)
- 20 世間の 人の歎きは 相思はぬ 君に安礼也母 あれやも 秋萩の 散らへる野辺の 初尾花 飯廬に暮きて 雲 あけやも (十五・三九二)
- 離れ 遠き国辺の 露霜の 寒き山辺に 夜杼里世流良牟 やとりせるらむ
- 21 葛木の そつびこ真弓 荒木にも 憑也君之 たのめやきみが 吾之名告兼 わがなをりけむ (十二・二六五)
- 22 伊豆の海に 立つ白波の ありつつも 継ぎなむものを 乱れしめめや 或本の歌に曰く 白雲の 絶 みだれそめけむ (十三・三六〇)
- えつつも 継がむと母倍也 もへや 美太礼曾米家武 みだれそめけむ

このIIIの形式にも、「已然形十や／やも」までの前件の表現とそれ以下の後件の表現との意味的関係にかかわる共通点がある。Iとまったく逆に、反語表現が「…だろうか、そうではないのに、…」という逆接的なニュアンスで後件をみちびくという点である。

一方、この八例をくわしくみると、これらは形態と意味との両面でさらに三種にわかれる。三種のそれぞれの特徴は、ほぼつぎのように要約できる。

- i 後件の末尾にある「む」によって、表現主体にとってのぞましくない事態を推量しそれを提示するもの
- ii 後件の末尾にある「らむ」によって、表現主体にとって意外で納得のいかない現在の事態を提示しその理由を推測するもの
- iii 後件の末尾にある「けむ」によって、表現主体にとって意外で納得のいかない過去の事態を提示しその理由を推測するもの

iに属するものは15～17の三例、iiに属するものは18～20の三例、iiiに属するものは21と22の二例である。ここで、みぎに要約してあげた三種の構文の特徴やそれらの差異を考慮にいれて、八例を口語に訳しておく。

- 15 … 雲などではないのに、その時が来るのを気長に待つのだろうか。
- 16 … 永遠に続く命ではないのに、逢わないまま恋し続けるのだろうか。
- 17 … 花のように眺めるだけの妻ではないのに、紐を解かずに寝るのだろうか。
- 18 … 乳を飲むわけではないのに、（どうして）あなたは乳母など求めているのか。
- 19 … 独りでいられるものではないのに、（どうして）島のむろの木は離れているのか。
- 20 … 人の嘆きを思わぬあなたではないのに、（どうして）秋萩の散る野辺の……寒い山辺に宿っているのか。
- 21 … 荒木のように（私を）頼りにしているわけではないのに、（どうして）私の名を人に言ってしまったの

か。

22 …途絶えがちになっても続けて行こうと（私がいい加減に）思っているわけではないのに、（どうしてあなたの心は）乱れ初めたのか。

3

語学専攻者をふくむおおくの研究者をなやませつづけてきた2の「鵜にしも有れや」の構文を具体的に解明することが本稿の直接の目的であるから、これと同種の構文をめぐる諸事実を確実におさえるために、「已然形＋や／やも」の用例のバラエティーは、ほとんどが明瞭な反語となる「――めや／めやも」の例をのぞいて、すべてみぎで確認した【助動詞「む」をふくむ「――めや／めやも」という結合形の用法は、文がこの結合形のところで明確に終止するという点では単純なものであるが、それがあらわす意味やニュアンスにおいては、動詞が構成する「已然形＋や／やも」のそれにくらべて多様であり、両者は別に処理する必要がある】。

いうまでもなく、文末に「む」をもつ「鵜にしも有れや家念はざらむ」という表現は、形式面ではⅢのiに属する。しかし、この表現に対する従来の解釈によれば、前件と後件との意味的關係においてはiに属する三例と相違することになる。本稿の第1節に引用した全集本の解説に「作者赤人の気持は、自分が家を思わずにいられることを望んでいると思われる」とあり、諸注でもそう解釈されているように、望郷の念にかられずにいることは作者にとってはのぞましい事態であるのに、ほかの三例の「時をし待たむ」「恋ひつつ居らむ」「紐解かず寝む」

などの事態はそれぞれの作者にとつて不本意な事態である。したがって、2をこれらの三例とおなじように、

2 …鵜などではないのに、家を思わないのだろうか。

と口訳すると、ひどく奇妙なことになる。この点で「鵜にしも有れや家念はざらむ」が例外的な表現であることは、やはり否定しえない事実である。その具体的な機構というべきものを明快に解析できない例外的な表現は、それを例外たらしめている要素をふくむはずである。その例外的な要素とはどんなことか。

Ⅱの形式に属する二十七例の半数以上が、10〈悲寸かなしき〉、11〈夢西所見ゆめにしきみゆる〉、12〈太寸おほき〉、13〈間使尔為まづかひにする〉、14〈安我あが故非和多流こひわたる〉のように、その表記あるいは語構成からみて歌末の活用語が連体形であることがわかる例である。Ⅱの構文の末尾に、終止形と連体形に形態的な区別のない活用語がくるばあいでも、とにかくそれは連体形だったのである。後件の表現が、前件の末尾にある「已然形＋や／やも」の係助詞「や」がもつ構文的統制力の支配下にあつたことの反映である。Ⅲも同様であつたことは、18の〈君きみが

やはり連体形で終止しているはずの2の「鵜にしも有れや家念はざらむ」と同様に、「思ふ」が否定・推量の二種の表現と結合した例には、「いかなる人か物不念有」〔王・三四云〕と「何故か不思議有」〔王・三元七〕との二例が『萬葉集』にあり、『古事記』にも「心をだにか阿比波母波受阿良牟」〔六〇〕という例がひとつある。上代にある三例は、みな係助詞「か」をうけて反語表現となつていのである。

「思ふ」以外の動詞が「――か――ざらむ／ずあらむ」という構文にふくまれたものは九例あり、そのうち反語表現を構成したものは、『萬葉集』に三例、宣命に一例ある【つぎの25の第五句を単なる推量と解する注釈と反語と解するそれとがあるが、結局は「色に出ずあらむ」ことは不可能だというのがその歌意であるから、反語と解すべきである】。

- 23 な思ひと 君は言へども 相はむ時 いつと知りて加 吾不恋有牟 あがこひざらむ (二・二四〇)
- 24 人目多み 常かくのみし 候はば 何 時 吾不恋將有 いづれのとき・あがこひざらむ (十一・三〇六)
- 25 いかにして 恋ひば可妹に 武蔵野の うけらが花の 伊呂尔但受安良牟 いろにせずあらむ (十四・三七六或本)
- 26 平けき時に奉侍ることは、誰 人不奉侍在 たれしひことつかへまつらあらむ (三・詔)

疑問詞のあとに「か」がもちいられた例しかないのは、疑問詞と係助詞との関係を包括的に論じた近時の研究によれば、疑問詞と「や」とがおなじ呼応関係を構成しえないことによるものであろう。「か」と「や」の用法上の相違はさまざまに論じられているが、この種の構文の疑問詞のあとにあらわれるのは、それが推量・反語のいずれをあらわす文であるかに関係なくすべて「か」であるということに注目しなければならない。

一方、「か」ではなく、「鵜にしも有れや家念はざらむ」と同様に「や」をもつ「――や――ざらむ／ずあらむ」という構文の例は六例あり、そのうちの三例は文中に「さへ」「だに」「はた」をふくむために単なる疑問推量をあらわす表現になっているが、のこる三例はそれらの語をもたず、みな反語表現を構成している。いずれも、疑

問詞がふくまれていない例である。

27 こちたくは かもかもせむを 石代の 野辺の下草 吾し荳りてば 一には云はく 紅の 現し心哉^う

於妹不相將有^{いもにあはざらむ}

〔七・三四〕

28 玉の緒の 現し心哉 年月の 行き易はるまで 妹尔不逢將有^{いもにあはざらむ}

〔十二・三九〕

29 此の家の子どもは朕がはらからに在るもの^を 親王たち治め賜ふ日に治め不賜^{たまはずあらむと}在^や止^やしてなも、汝に冠位

上げ賜ひ治め賜ふ。

〔三・五四〕

27にそえられた異伝と28とは、ほぼ同様の表現である。「現し心や」を「妹に逢はざらむ」がうけるこれらの表現は、諸注にあるように「落ち着いた気持ちで妹に逢わずにいられるだろうか、いられるはずはない」つまり「妹に逢わずに正気でいられるはずはない」の意の反語である。宣命にみえる29も、一読して反語だとわかる表現である。

以上の諸例は、係助詞「か／や」に応じた「――ざらむ／ずあらむ」が反語表現を構成した例であるが、係助詞をともなわない「――ざらむ／ずあらむ」の例には、

30 天地と 長く久しく 万代に 不改將有^{かはらずあらむ} 行幸の宮

〔三・三五〕

31 夢にだに 見えむと吾は ほどけども 相し思はねば 諾不所見有武^{うへみえざらむ}

〔四・七三〕

32 吾が背児が 浜行く風の いやはやに はやことなさば 益不相有^{いやはやはざらむ}

〔十二・四九五〕

の三例がある。これらがみな反語でなく単なる推量表現であることは、以上の「――ざらむ／ずあらむ」などの否定表現が、係助詞「か／や」と呼応することによって反語を構成しえたことをしめすものである。

「さへ」「だに」「はた」をふくまない「――か／や――ざらむ」という構文が反語としてのみもちいられるというのは、中古においても同様であつたらしい。『古今和歌集』に五例あるこの構文は明瞭な反語かそうと解しうるものだけである⁷。さらに、『後撰和歌集』に三例と『拾遺和歌集』に六例みえるこの構文の例もすべて反語表現である。和歌にもちいられるこの構文は反語にもちいられるのが原則であつた、ということが確認できるのである。

4

こうみてくると、「――や――ざらむ」という構文に属する「鵜にしも有れや家念はざらむ」の「家念はざらむ」もまた、前件の末尾にある「や」に応じて反語となっていた可能性がたかいことを想定させる。さきに確認したとおり、文中に位置する「已然形＋や／やも」の「や／やも」がそれ以下の表現に対してもつ構文上の統制力は顕著なものであつたから、「鵜にしも有れや」の「や」がもつ統制力のために、ただでさえ反語となる「念はざらむ」をふくむ2の「家念はざらむ」という表現はなおさら反語表現になりやすかつた、という可能性が想

定されるのである。

「――や――む」の呼応が反語表現を構成した確実なものは『萬葉集』では一例しかなく、ほかはみな「荒垣の外に也・吾が將見」〔五・二五六〕や「遅れゐて吾は也・將恋」〔五・二七〕のように、表現主体が自分のことを疑問推量のかたちで詠嘆した例であるということが指摘されている⁽⁸⁾。しかし、その指摘は、否定表現をふくまない用例を挙示したうえでなされたものであり、「――や――む」は一般に反語とならないという点は、否定表現をふくむ27と28の二例にはかならずしも該当しない。上代に三例ある「思はざらむ／思ずあらむ」がそろって反語表現であることを考慮しなければならない。

一方、「――や――む」は表現主体が自分のことを詠嘆をこめて推量するのにもちいられる構文であるということはこの27と28にも該当し、これらの例では作者にとって不本意な「妹に逢はざらむ」という事態が詠嘆をこめつつ想定されている。その不本意な事態に対する詠嘆は、「妹に逢わずにいられるはずはない」という反語的なニュアンスによって結果的におおわれてしまうにすぎないのである。この二例は2の「家念はざらむ」と同様に「――や――む」が否定表現をふくんでおり、そのことが表現全体に反語的なニュアンスを付与しているわけであるが、iに属するほかの三例の後件は、否定表現をふくんでいないから反語となっていた可能性はひくいとみられる。

2の「家念はざらむ」という句が反語表現であり、結局は「家を念はむ」の意をあらわすものであるとすれば、望郷の念にかられるという不本意な事態を作者みずから推量提示したものとなるから、この句は、おなじく歌末の「む」で不本意な事態を推量提示する、iに属する三例とパラレルな表現であることになる。

なお、そのばあいに問題となりそうなのは、「鵜にしも有れや」と「家念はざらむ」とがともに反語表現であれば、対句でもない部分に反語表現が連接して出現することになるという点である。しかし、「已然形+やも」のところで文が終止する長歌の例ではあるが、

- 33 おほろかに こころ 情尽して 念ふらむ その子奈礼夜母 なれやも 大夫夜 はすむのや 无奈之久可_レ在_二……後の代の 語り継ぐべ
く 名を立つべしも

〔一九・四一六四〕

という反語の連接する例が実際にある。辞句の使用にきびしい物理的制限のある短歌とそれに余裕のある長歌と一緒に論じるわけにはいかないし、また、おなじ反語でありながら、この33はIに属する例であるのに対して2はIIIに属する例であるという明白な差異があり、33が厳密な意味での類例ではないことを承知しておかなければならないにしても、対句でない部分に反語をつづけてもちいる表現が特に奇異なものでなかったことがこの例の存在からわかる。また、つぎの『古今和歌集』の歌は短歌が二種の反語表現によって構成されたものであり、その点で2の歌と同類である。

- 34 散る花を 何かうらみむ 世の中に 我が身もともに あらむものは
〔二・二二〕

2の歌は長歌Iにそえられた反歌であるが、その長歌の中間部分には「いなみつま 辛荷の嶋の 嶋の際ゆ

吾家を見れば」とあり、またその末尾には、

… 傍ぎたむる 浦の尽 往き隠る 嶋の埼々 隈も置かず 憶ひそ吾が来る 旅の日長み

とある。これらの長歌の表現の内容を縮約したかたちのものが、本稿で問題にしている第一反歌2の表現である。長歌でも第二反歌3の「ともしかも 倭へ上る 真熊野の船」という部分でも、つよい望郷の念にとらわれている作者の心情がのべられている。作者は、そうした心情を積極的に表明するために、ほかの三例のような「――や――む」の構文ではなく、あえて「――や――ざらむ」という反語の構文をもちいて自身の心境を強調的に表現したのだろうと推測できる。

以上で確認した、2の第四句と第五句にかかわる、

- a 反語表現の「有れや」が逆接的な関係で「家念はざらむ」をみちびくこと
- b 「有れや」の「や」が文末の活用形に対してもつ統制力が「家念はざらむ」におよぶこと
- c 三例ある「思はざらむ／思はずあらむ」の用例がみな反語表現となっていること
- d 三例ある「――や――ざらむ／ずあらむ」の用例がみな反語表現となっていること
- e 「――や――む」の構文が、表現主体にかかわる不本意な事態を詠嘆をこめて推量するものであること

の五点を考慮しつつこれを口訳すれば、つぎのようなものにかなりえないであろう。

2 … 鵜などではないのに、家を思わないでいられるのだろうか（そんなことはない）。

結局は望郷の念にかられることを想定した表現であるから、後件を「だから、家と思うだろう」といいかえることが可能のようではあるが、それでは、不本意な事態を「む」によって推量する、同一の構文に属するほかの三例の表現があらわすニュアンスとずれてしまう。

この歌の表現の機構というべきものが明確に把握できず、したがってその解釈が研究者によってまちまちであるのは、否定表現をふくむ後件が前件の「や」に応じて反語となっているという特異性を説明できないでいることによる。当該歌の表現を例外的なものにしてしまった要素は、「家念はざらむ」が反語表現であるという点なのである。

本稿の冒頭に列挙した十種の注釈の口語訳・大意のなかには、この構文によってあらわされるニュアンスを的確にとらえたものはない。あえていえば、大系本・集成本や『萬葉集釋注』などの解釈が全体としては妥当なものにちかいが、「む」によって推量した事態を作者が不本意だと判断していることをはっきりと感じとらせるような解釈にはなっていない。

「鵜にしも有れや」と次句の「家念はざらむ」との構文的・意味的關係を以上のようなものと解すると、それは、さきに引用した全集本の解説にみえる指摘と抵触するところがある。

つまり、そこには、「鵜にしも有れや」が属する構文は「普通、他人の事に関して」疑問推量する際にもちいられるものであるという説明がみえ、「鵜にしも有れや家念はざらむ」という表現に関する「自分以外の人について、家を思わないでいられるとはあの人は鵜でもあるからなのだろうか、と解するのが上代語一般としては正しいが、…」という指摘もみえる。しかし、これらは実際の用例から帰納することができない不適切な指摘である。なぜなら、厳密な意味で「鵜にしも有れや」が属する i の構文の例は実際には三例しかないから、そのように断定することが不可能であるという一般的な理由のほかに、現にその三例のうち15の「命なれやも」について、ほかならぬ全集本・新編全集本に「恋しく思いながら逢わずにいる現在の自分の状態について、いつまで生きるつもりなのか、と自ら責めたもの。」(傍点は佐佐木による)という矛盾した説明があり、諸注でも「命なれやも恋ひつつ居らむ」は作者自身のことをのべたものだと解釈されているからである。それだけでなく、のこる16の「雲にしも有れや時を待たむ」という部分と17の「紐解かず寝む」という部分もまた、作者のことをのべたものだと解しても問題を生じない。特に「紐解かず寝む」と同一の句は、ほかに「君来ませるに紐不開寐」(「三三四」と「家なる吾は比毛等加受称牟」(「千四二六」の二例が『萬葉集』にあり、ともに作者自身に関する表現であるから、17のはあいもそうである可能性はある。

IIIと同様に「已然形十や／やも」という結合形が文中に位置するIIの用例のなかにも、10の「古の人に吾有れや」をはじめとして、これを作者自身についてもちいた例がいくつかみえる。「普通、他人の事に関して」疑問推量するのにもちいたといえはいえるのは、むしろ「らむ」を末尾にもつiiの三例の方である。

注(1) これを正面から論じたものに、つぎの諸論考がある。

木下正俊「条件法における仮定確定の呼応の存否とそれに関する万葉集の訓詁私見」〔『国語国文』昭和二十七年三月〕。

同「水鳥二四毛有哉 其他」〔『萬葉』十四號(昭和三十一年一月)〕。

同「疑問条件法について」〔『萬葉集語法の研究』(一九七二年)のI部〕。

吉永登「已然形にヤの添うた形について」「已然形にヤの添うた形統考」「已然形にヤの添うた形追考」〔『万葉―その探求』(一九八一年)〕。

佐伯梅友「鵜にしもあれや」〔『文学語学』四(昭和三十二年六月)〕。

武田祐吉「動詞性用言の已然形を形態とする条件法」〔『萬葉集全註釋』(一九五七年)〕。

門前真一「水鳥二四毛有哉」私案〔『天理大学学報』第二十五輯(一九五八年)〕。

(2) 注(1)の吉永の論

(3) 唯一の例外はつぎの歌である。

うつたへに 前垣まかきのすがた 見まく欲り 行かむと云哉 君を見にこそ

四七七

(4) このIIIのiに属する可能性のある例に、つぎの一首がある。第四句の末尾の二字を「念ふ夜」と訓ずる注釈もあり、その訓がただしければ問題とする必要がない。

天漢 夜船を榜ほうぎて 明けぬとも 将相わいはむ等念夜 袖易受そくやす將有

千二〇〇

(5) 『古事記』の「心をだにか相思はずあらむ」の解釈は注釈によつて若干こととなるが、たとえば新編全集本に「心だけでもお互いに思わずにいられようか」とあるように、反語と解さなければならぬものである。

(6) 大野晋『係り結びの研究』(一九九三年)の第一章・第五章。

(7) 『古今和歌集』のものだけ例をあげておくと、その五例はつぎのとおりである【「…ずしもあらむ」の例がひとつふくまれている】。

植ゑし植ゑば 秋無き時や 咲かざらむ 花こそ散らめ 根さへ枯れめや

〔五二六〕

かぢにあたる 波のしづくを 春なれば いかさき散る 花と見ざらむ

〔一四四五〕

人目もる 吾かはあやな 花すすき などか穂に出て 恋ひずしもあらむ

〔三六四四〕

いかならむ いはほの中に 住まばかは 世のうきことの 聞え来ざらむ

〔六六五五〕

野とならば 鵜となきて 年はへむ かりにだにやは 君は来ざらむ

〔六七七五〕

(8) 「や」と「む」の呼応した表現が作者自身のことを詠嘆をこめてのべるのにもちいられたことは、澤瀉久孝の「「か」より「や」への推移」(『萬葉の作品と時代』(一九四一年))という論考に指摘があり、そのことを中心に論じたものには、

木下正俊の「「欺くや嘆かむ」という語法」(『萬葉集研究』第七集(一九七八年))がある。また、その木下の論を参考

にして2と15、17の四例の構文や表現を論じたものに、鈴木義和の「上代語におけるへく已然形十や、くむ」型の文について

で」(『園田国文』6(一九九一年))があるが、この鈴木木の論は、2の「家念はざらむ」という表現の特殊性に気づいて

いないことその他の点のおおくの点で視点が本稿のそれとおおきくずれており、その帰結もまた本稿とは別なものになっている。

(日本語日本文学科 教授)

『萬葉集』の「鵜にしも有れや家念はざらむ」（佐佐木）